愛知県人権擁護委員連合会長賞

笑顔の連鎖のためにも

刈谷市立朝日中学校１年　重野　遥香

今年のゴールデンウィークに兄が大学野球の練習会に参加するため、東京に遠征することになった。私の家族はそれを見学するという大義名分の元、東京旅行をすることにした。久しぶりの旅行！心の底から嬉しかった。

遠征当日、大学での兄の練習会を少し見学した後、私達は宿泊する有明のホテルにチェックインした。この日の夜は月島のもんじゃ焼きを食べに行くと決めていた。

初めてのもんじゃ焼きにワクワクしながら国際展示場駅まで徒歩で行き、そこからりんかい線で新木場まで行き、有楽町線に乗り換え月島を目指した。その時、忘れもしない出来事が起きた。新木場発のため新木場ですんなりと座ることが出来た。ただ、連休の夕方、座席はほぼ満席になっていた。新木場を発車し一駅過ぎたとき、足を引きずり大きな荷物を抱えた高齢の男性が電車に乗り込んで来て私達の前に立った。お父さんはすぐに立ち上がり、その高齢の男性に声をかけた。

「よろしかったらど・・・・」

「いらぬお世話はするな！」

とお父さんの発言が終わる前に激しく強い口調でお父さんに怒鳴った。

車内は一瞬にして静まり返った。お父さんは、深く頭を下げ、「申し訳ございません。」と謝罪し席にまた座った。

車内は一気に重い空気になり、見ていない。気づいていない。知らない。全ての人へ嫌な空気が広がった。私も恐怖と動揺で、何をしていいのか分からなくなり、早く時間が過ぎて欲しいと下を向いたまま願った。そこからの二駅は今までの人生で一番長く嫌な時間に感じた。

月島駅に到着し地上へ上がった。もんじゃ屋さんが所せましと立ち並び、ゴールデンウィークの人出と共に活気と笑顔で溢れていた。しかし、私の家族だけは取り残されたようにどんより重い空気に包まれていた。何が正解なの？あの時の父の行動は非難されるべき行動だったの？自分は何をすべきだったの？周りにいた人は何を思っていたの？自分の心のモヤモヤは増すばかりだった。

もんじゃ屋さんに入店し注文した品が並んだ。たわいのない話はするもの

の全く頭には入ってこなかった。私は何か我慢できずに、
「やっぱり、あんな言い方ないよね。」
と突然言った。お父さんもお母さんも直ぐに理解した。お父さんはニコッと笑って、
「ごめんな。嫌な感じになるよな。」
もんじゃのふちを作りながら続けた。
「本当に難しいよね。足が悪そうな方を見たら席を譲ろうとする。高齢な方を見たら席を譲ろうとする。ただ、こちらも親切の押しつけにならないように意識して、一度相手の立場で考えてから、丁寧に申し出てるつもりでも、相手を不快な思いにさせてしまうこともあるんだよね。席を譲ってもらうことが不快だと分かっていたら、勿論申し出ることはしないんだけど、相手の気持ちを完全に察することが出来ないからね。本当に難しいよね。」
といつも以上に丁寧にゆっくり話した。その時、ある場面が頭の中に浮かんだ。
　私には千葉に祖父母がいる。祖父は腰が悪く、歩く時にはいつも杖が手放せない。そんな祖父はいつも口癖のように「遥香ちゃんが毎年来てくれる度に、杖の数が増えていくよ。」と年々腰が悪くなることを冗談めかして言う。面白い祖父だ。私は祖父の家に行くと、祖父の散歩に付き合う。杖をついてゆっくり歩くからどうしても色々と気になり「ここに段差あるよ。」「ゆっくりでいいよ。」「休もうか。」ついつい色々と気を使ってしまう。そんな時、「遥香ちゃん。優しいな。でも、そんなに心配してもらうと、おじいちゃん、もっと体悪くなっちゃうよ。大丈夫だから普通でいいよ。」と祖父が笑顔で言った。その場面を急に思い出した。あれ？私は親切の押しつけをしていたのだろうか・・・。
　今、日本は高齢化社会、インターネットの普及による情報社会、価値観の多様化を認める社会など本当に複雑な環境変化の中にある。子供、高齢者、障害者、外国の人、ジェンダーレスなど様々な人がそれぞれの適した生活の中での幸せと豊かさを求めている。そして全ての人にはそれぞれの目線や立場や思いがある。それらが守られて初めて幸せや豊かさがあるのかもしれない。人が幸せであるためには相手を思いやる一人一人の親切や優しさは、もちろん必要ではあると思う。ただ、個人の判断による優しさや親切だけでは、実現は難しいとも思う。幸せな社会を実現するためには様々な立場や思いを守る社会的なルールや規則の確立と様々な立場や思いを正しく理解すること、正しく学ぶことも必要だと強く感じた。あの電車の中で感じた不快な連鎖ではなく、笑顔の連鎖が広がるためにも。